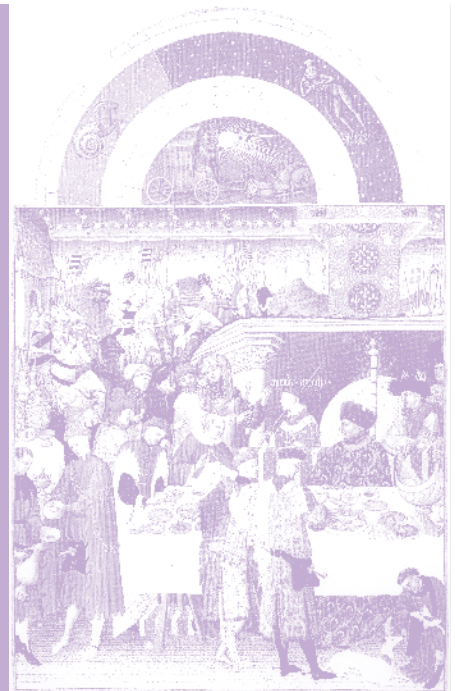


# Newsletter 13

慶應義塾大学教養研究センターニューズレター第13号 / 2009年1月15日発行

## Contents

- 1 巻頭言 **混沌に耐える**
- 2 特集 **「体験と実学」**  
身体知実験授業 / 第一回鶴岡セミナー / 「三田の家」と「芝の家」 / 「日吉の家」
- 6 活動報告 実験授業「現代の危機—宗教と民族問題」 / サイエンス・カフェ / 2008年日吉キャンパス公開講座秋学期 / 日吉行事企画委員会 (HAPP) 秋学期の活動 / 追悼：経済学部教授 小淵昭夫先生
- 8 ニュースフラッシュ HRP2008 / アカデミック・スキルズ プレゼンテーションコンペティション / 生命の教養学 2009年度予告 / 基盤研究 カリキュラム研究 / 慶應義塾コレgium・ムジクム演奏会 / 新メンバー紹介
- 8 事務局だより 協働で創る!



## Foreword



### 混沌に耐える

教養研究センター副所長  
種村和史 (商学部)  
Kazufumi Tanemura

まったくの混沌です。諸事さちんさちんと片付けられず、にっちもさっちもいかない状態に陥ってしまっている私個人のことはこの際おいとくとしても、慶應全体、日本全体、世界全体、どこを向いてもだれもが荒波のただ中にもがいているようです。

こうした状況下でいかに処すべきか。むかし宋の文学者蘇東坡は、当時の宰相王安石が天下の學術思想を統制しようとしたとき言いました。「豊饒な土地というのはいずこも同じように物を生み育てる力を持っているけれども、そこに生まれるのは同じものばかりではない。ただ、荒れて痩せた塩気混じりの不毛の土地には、はるかに見渡す限り一面、黄色いチガヤ白いアシが生えているばかりだ。これこそが彼の目指す<同じ>ということだ。」これはかみしめるべき言葉だと思います。濃霧のような視界不良の中に立ちすくんでいると、ともすれば物事をばっさりさっぱりと整理して見晴らしをよくしたくなります。しかし、『莊子』に見える渾沌の神が目鼻を穿たれて七日目に死んでしまったように、混沌は確かに耐えがたいけれど、わかりやすくしようと斧を振ったあげく、本来持っていた豊かな内実と可能性までそぎ落として、結局残されたのは見た目

こそきれいだけれど中身は脆弱な身体だけだったということになるのを恐れます。

教養とは混沌に耐える力だと思います。慌てて結論を出さないこと、煮え切らない状況にあえて踏みとどまること、古いものイコール旧弊なものとして短絡しないこと、新奇なことイコール胡散臭いものとして自分の視野から遠ざけてこと足れりとしめないこと、そして混沌の内実をしっかりと見つけて、そのたくましい生命力と豊かな可能性とを自分の身内に取り込むこと、そのような余裕と勇氣こそが、教養なのではないでしょうか。それを学ぶことがますます必要とされているように思います。

とりわけ、いろいろな資質と希望を持った人間が集まりそれぞれの可能性を追究する場である慶應義塾においては、万事無秩序でてんでばらばらの烏合の衆のように見えてしまいがちですが、一つのわかりやすい価値観によって割り切るのではなく、たとえ泥臭くおぼつかなく思えようとも、さまざまな世界や価値観のごった煮のおいしさを醸し出す努力が必要なのではないでしょうか。早く実りを得ようと焦って、肥やしのつもりで撒いてみたら実は塩だった、ということになっては元も子もありません。むしろ混沌こそが慶應義塾の潜在力と開き直って、そこに漂うものが時あって成熟したがいには手を取り合う様を見守っていれば、再び蘇東坡の言葉ですが「造物主の無尽蔵」のごとき豊饒を慶應義塾に感じられるようになると楽観しています。そして教養研究センターは、混沌の中に漂いながら手をさしのべているもの同士が結びつく手助けをするために、さまざまな試みを行ったらいののではないかと、私もほんの少しでもそのお役に立てたら、と思います。

表紙について：「ベリー公の美わしき時持書」(Les Belles Heures du Duc de Berry) の名で知られる15世紀フランスの彩色写本から。今回は1月の暦をご紹介します。ドーム型に刻まれた精緻な星座や画面前方の行事や農作業の様子が季節の変化を示しています。



## 体験と実学

——福澤諭吉の明るさから楽しい教養研究センターへ

教養研究センター副所長  
武藤浩史（法学部）

Hiroshi Muto

〔学問教育の無益さを説く者に対して、即座の実利を求めるその性急さを批判して、曰く。〕文明の実学誠に実なりと云うも唯事物の真理原則を明にしてその応用の法を説くのみ。（『福翁百話』）

今日の書生にしても余り学問を勉強すると同時に始終我身の行く先ばかり考えているようでは、修業は出来なからうと思う。さればといってただ迂闊に本ばかり見ているのは最も宜しくない。（『福翁自伝』）

みなさん、無学な学者が専門外の福澤論から始めることをどうぞお許してください。

まず、福澤精神の基本を成す実学について語ります。

福澤研究の難しさは、彼のテキストが究極的には訓詁の学を否定するという事ではないでしょうか。その著書において現実からの逃避としての読書が何度も厳しく批判されているわけですから、福澤研究が古臭い訓詁学に留まれば、福澤精神を裏切ることになるだろうと愚考します。つまり、福澤諭吉の著作とは、慶應義塾創立当時とは大きく異なる創立150年後の現在の私たちの生き方を凝視しながらの、創造的な読み替えを強く要求するテキストである、と言えるでしょう。実学をはじめとする福澤精神の基本を守りながら、そのテキストを大胆に読み替えることにより、未来を先導しなければいけないのだと思います。

そして、福澤の精神を現代に生かすことを考えた時に、実学という理念は、福澤のテキストの意味を狭く捉えて、数理に基づくものと決めつけてはいけなく、また、さらに浅薄に、これをすぐに役立つ類の知と定義してもいけないのだと思います。冒頭の引用にもある通り、短絡と性急を戒める福澤自身の警告もあります。むしろ、今大切なのは、視野を広く取って、現代という時代を見つめる姿勢です。現代と福澤の時代との最も大きな違いは、進歩の概念の崩壊でしょう。もはや、技術の発達に伴ってよりよい未来が自動的に到来するという発想は時代遅れのものとなりました。西洋の「数量化革命」への信仰も揺らぎました。それから、福澤の時代には、心を扱う科学が十分に発達していませんでした。20世紀の偉大な達成と言うべき精神分析もなければ、認知科学も、脳科学も、ありませんでした。進歩という大き

な信仰の下で、自己を内省するためのスキルが足りなかったし、また、それほど必要ともされなかった時代でした。この違いを考え抜いた上でなければ、21世紀の実学とは何かという答えは出てこないはずで、さまざまな角度から心を見つめて、それを通して自己システムと社会システムの双方を相互に関連づけながら総合的に理解する力が21世紀の実学には必要です。どうすれば自殺者が3万人を超す現代の日本で未来に向けて善く生きられるかを具体的に考えることが真の実学です。

このような実学的知に至るために大切なのは、体験です。体験こそ実効的な知性の礎を築くものですから。そのことも、福澤の一生を見れば分かることです。彼の人生は現場体験に満ち満ちています。彼の英学発心自体、横浜で英語の隆盛を目撃した現場体験に誘発されたものでした。冒頭の引用の最終文からも分かる通り、彼は本を読んではばかりでは駄目だということを繰り返し説き、『学問のすゝめ』の中の同様の文章の後では「ヨブセルウェーション」の大切さが強調されます。そして、渡航により外国という現場を体験し観察することで自らの思想を鍛えていったのですから、体験なくして実学なしと言うことができます。それは、現在東京国立博物館で開催中の「未来をひらく福澤諭吉展」でも強調される福澤の身体性の問題とも合わせて、考えられるべき問題です。

今、教養研究センターでは、実験授業をはじめとして現代を善く生きるための体験型の試みが、さまざまな所で行われ、参加者の熱狂的反応という形で、大きな成功が確認されつつあります。その詳細については、この文の後に続く、身体知実験授業、第一回鶴岡セミナー、「三田の家」と「芝の家」、「日吉の家」などの記事をお読みください。これらの試みは担当教員にとっても、非常に楽しい体験です。教員としてのノウハウが増え、人としての視野が広がり、学生の生き生きした顔を見るというこの上ない労働の対価を受け取ります。実に楽しく、実学は実楽とも書けることが分かります。できるだけ多くの人たちにこの幸せを共有してもらいたい。福澤諭吉は明るい覚悟のあった人だったと思いますが、その明るさが150年後のこの楽しさに繋がっています。今、教養研究センターは、福澤精神を継承しつつ、楽しさに満ち満ちています。

Article—①

## 身体知実験授業

IT化がどんどん進み、情報の波にともすれば飲み込まれてしまうこの社会では、とにかく立ち止まって、考えたり批判したりする時間がほとんどありません。この情報の波を巧妙に乗りこなす、同時に短期間により多くの波を作り出していくことは、ひとつの文化ともなっています。しかし、波を作り出していくと同時に波の生み出すインパクトを批判的に見つめる態度こそが重要でしょう。情報をただの文字や視覚のみでとらえて吸収するだけでは、「物知り」にはなれても、本当に理解したことにはなりません。頭でわかっても身体と心で理解していなくてはおそらくその情報は長らく記憶にすらとどまらないでしょう。もちろん体験学習は大学の各分野でますます重要視されてきています。インターンシップ、サービス・ラーニングの導入、フィールドワークでの理論の確認など、学生たちはキャンパスを出て、どんどん外で活動しています。しかし、そのための「からだ」と「こころ」の存在はどうでしょうか？ 外に出て行く前に、自分の意見をしっかりと構築しているかどうか、ほかと交流し、意見を交換する態度はできているのかという基礎の部分ですべての学生が確立しているわけではありません。

同時に学生たちにとっての表現方法も限られています。文字やパワーポイントなど、視覚に訴える方法による表現はさまざまなクラスで浸透していますが、自己表現と授業運営でそれ以外の方法は可能なかどうか。文字や、図像や絵画などで視覚化された情報をまったく異なった方法で「理解し、表現」しなおすことはできるのか。これらの視点から教養研究センターでは基盤研究のひとつとして2005年に「身体知プロジェクト」を立ち上げ、その中で「からだ」と「こころ」を中心にした研究と実験授業を展開しています。（教養研究センターの考える「身体知」と「身体知プロジェクト」については教養研究センターの『Newsletter』第10号の特集記事「身体知の理念と可能性」をご覧ください。）ここでは2008年度に開催された、プロジェクトのふたつの実験授業をご紹介します。

### 1. 2008年度「未来先導基金」採択事業

#### 「声を考えるプロジェクト」

2008年度の創立150年記念未来先導基金採択事業「『声』を考えるプロジェクト」では、「声と身体と歴史文化の接点を考える教育の実践」の一環として、「新しい文学の実験授業②——『ジョン・ボールの夢』を体感する」（コーディネーター：横山千晶）を開催しました。ここでは去年の「新しい文学の実験

授業①」（コーディネーター：武藤浩史）と同様に夏休みの1週間を利用して、ウィリアム・モリスのユートピア小説『ジョン・ボールの夢』を頭と身体を使って読み解きました。講師としてお招きしたのは、俳優・戯曲家・演出家の松井周氏、俳優・声優の坂口芳貞氏、臨床心理学者の佐藤仁美氏、音楽家の永田平八氏、アーチェリーの川西大介氏の各専門家です。授業ではテキストの対話部分から演劇を作ったり、演説の部分を実演してみたり、文字で表現されたバラッドの歌詞を翻案して曲をつけて謡ったり、テキストに登場する弓の実演などを通して、小説を「体感」しました。そしてより深まった理解をもとに各自、歌、戯曲、演説などを創作し、最終日に講師を招いて発表会を行いました。学生たちの意欲と熱意は去年同様非常に高く、アンケート調査でも高い評価を得ました。文字の世界で終始しがちな文学作品を「からだ」を通して理解することは、参加者に新たな解釈の喜びをもたらしてくれたのです。またアーティストとのコラボレーションにより、学生を異なった分野の専門家たちが育てていくという新たな社会連携も確立できました。このノウハウをほかの分野でも活かす教育システムを確立することがこれからの課題です。

### 2. 実験授業「第3回 体をひらく・心をひらく——ポクってどこにいるの？」

今年で3回目を迎えた秋の実験授業は、10月の終わりから12月の始めまで、計6回のプログラムで行われ、「ポクってどこにいるの？」の副題のとおり、複数の表現方法を使って自分探しと他人との交流を模索しました（コーディネーター：手塚千鶴子、武藤浩史、横山千晶）。今年には学生たちにはあまりなじみのない「詩」という文字表現を中心にすえ、朗読、コラージュの作成、パントマイムなどのさまざまな方法で「自分探し」を実践しました。第5回目から各自の創作活動を行い、最終日はぜひともみなに食べてもらいたい「ワタシ・フード」を持ち寄って創作発表会を行いました。最終日は詩、朗読、音楽、パントマイム、コラージュ、演劇などのさまざまな創作発表で大いに盛り上がりましたが、最も興味深かったのは、参加者が協同し共鳴しあって（音楽に合わせて即興に踊る、詩に合わせて歌をつける）、あらたな創作の場面が創出されたことです。このような濃密な交流の場は、普段の授業でこそぜひとも創出したい空間と時間を提供してくれたのです。

今回ご紹介したふたつのプログラムは教養研究センターの展



開する身体知研究の実践の一部です。教養研究センターの使命はこれまで実践されてきたユニークな試みを分析し、より広くさまざまな分野で実験を行いつつその成果を外部に公表し批評を受け、汎用性のある教育モデルを作り上げていくことです。このプロジェクトに対するアイデアの提供や研究会・実験授業への参加を心よりお待ちしております。(横山千晶)

## Article—②

## 第一回鶴岡セミナー

2008年8月31日から9月3日にかけて教養研究センター主催の第一回鶴岡セミナーが開催されました。鶴岡セミナーは、2008年3月に終了した特定研究・学術フロンティア「超表象デジタル研究」プロジェクトの成果「21世紀型キャンパス構想—バリアフリー・キャンパスの構築を目指して—」に基づいた新たな教養教育モデルの一環として構想されたものです。セミナーの趣旨は、ふだんとは異なる環境の中に身を置き、未知のものに出会い、それを心と体と頭を存分に使って身に染みこませることで学びのフィールドを広げることにあります。その意味では、義塾がタウンキャンパス(TTCK)を持つ庄内・鶴岡は日本海、庄内平野、出羽三山が織り成す小宇宙の中央に位置し、豊かな自然と文化、歴史に恵まれた格好のフィールドです。また、このセミナーを地元との交流・連携の契機とも位置づけ、義塾の学生や卒業生に加え、東北公益文科大学の学生・社会人院生からも参加を募り、最終的に22名の参加を見ることができました(うち卒業生も含め慶應関係13名)。

セミナーの総合テーマは『鶴岡に学ぶ「生命(いのち)」—心と体と頭と—』、基調テーマは「知る・見る・表現する—行動の教養学入門」、そして年度テーマは「生命の源—死を想い、生きることを考える」として、今年度は羽黒修験と即身仏を取り上げました。同時に、慶應義塾アートセンターとDMCとの共催による特別企画として舞踏家・土方巽の土人形を作成し、これを水滴で崩していく様を中継する「命の実感プログラム:土の土方と水滴の時間」も行いました。

セミナーのスケジュールは以下の通りです。参加者は3グループに分かれてプレゼンテーションのテーマを見つけるべく、積極的にスケジュールをこなしました。

- ・8月31日(セッションI・全体学習):富塚陽一氏(鶴岡市長)のご挨拶、小松隆二氏(東北公益文科大学前学長)、坂上弘氏(作家・日本文芸家協会理事長)の基調講演、辻孝二郎氏(INAXライブミュージアム館長)の「土の土方」オープニング講演(於・TTCK すべて一般公開)
- ・9月1日(セッションII・フィールドアクティビティ①):羽黒山見学(正

善院黄金堂・羽黒山五重塔・出羽三山神社齋館・羽黒山山頂・出羽三山歴史博物館・羽黒山荒沢寺)と内藤正敏氏(東北芸術工科大学教授・写真家)による羽黒修験の講義(於・月山荘)

・9月2日(同・フィールドアクティビティ②):内藤正敏氏による即身仏の講義(於・TTCK)と即身仏見学(本明寺・注連寺)、鶴岡市郷土資料館での資料検索を経てグループ・プレゼンテーション準備(於・月山荘)

・9月3日(セッションIII:プレゼンテーション):3グループによるプレゼンテーションと森下隆氏(慶應義塾大学アートセンター訪問所員)による「土の土方」関連講演(於・TTCK すべて一般公開)

[なお、7月30日には日吉においてプレ企画として映画『蟬しぐれ』上映会と同映画のプロデューサー・宇生雅明氏(庄内映画村社長)による講演も実施しました]

また、11月15日にはHRP(Hiyoshi Research Portfolio)の一環として、現地でのグループ・プレゼンテーションをさらにブラッシュアップさせた参加者(全員出席)による成果報告会を日吉(来往舎シンポジウムスペース)で開催しました。この報告会には、義塾の教職員や学生・生徒に加えて地元からも致道博物館館長の酒井忠久氏・同常務理事の酒井天美氏、東北公益文科大学公益学部長の大蔵恒彦氏をはじめ多くの方々に参加してくださいました。セミナーの詳細については、あらためて報告書を作成しますので、セミナーHPと併せてご覧頂ければ幸いです。

最後に、セミナー開催に当たってさまざまな形でご支援・ご協力くださった鶴岡市役所、東北公益文科大学、株式会社ウィルコム、INAX、株式会社テレサポートやご寄付をいただいた方々にあらためて感謝申し上げますと共に、今後のより一層のご理解とご支援・ご協力をお願いする次第です。ありがとうございました。(鶴岡セミナー・プロジェクトリーダー 羽田 功)



## Article—③

## 「三田の家」と「芝の家」

—大学の外の学びの場

## 三田の家

「三田の家」とは、教養研究センター学術フロンティア「インター・キャンパス構築」プログラムと三田商店街振興組合が協力して始めたプロジェクトの総称です。三田キャンパス大学近くの本造住宅を拠点とした活動をしており、2006年9月30日より一般に公開しています。現在は創立150年未来先導基金の事業として採択されています。



三田の家は、まずは三田の近辺で活動する多様な人々——すなわち、学生（留学生、日本人学生）、教職員、地域の在勤者、商店主など——が、気軽に交流できる場所を提案することを目指しています。そして、この場所で多様な人々が交流し、様々な活動を協力し合いながら行うという、新しい「学び」

や「出会い」、「まちづくり」の形が生まれることを目標として活動しています。

日常の運営は、曜日ごとの場づくりを担当するマスターをメンバーの代表として任命し、マスターと学生スタッフが共同で運営するというマスター制をとっています。これは、特定の個人に負担がかからないための工夫にとどまらず、この活動をユニークなものにしています。マスターは、担当の曜日に、自身の考えを表現するための場作りを行っています。その結果、場の雰囲気は曜日によってまったく異なり、活動内容も多岐にわたります。

現在の主な活動内容は、大学内では実現しづらい小規模のレクチャーや身体知的なプログラムの計画・運営や、留学生同士の交流会や、商店街のイベントに対する地域づくりなどをテーマにした活動をしています。また、キャンパスを飛び出してオープンなゼミ活動を行う曜日もあり、活発な活動をしています。

## 芝の家

このような三田の家における活動に加えて、2008年10月より、新しい地域の拠点として、「芝の家」が発足しました。これは、港区芝地区総合支所による昭和30年代のあたたかい人と人とのつながりの再生を目的とした「昭和の地域力再発見事

業」の一環として活動しています。主な対象としては地域の住民の交流促進を目指しており、三田の家の活動と結びついていることから協力体制を取っています。このように活動の場が広がったのは、三田の家の活動について、地域の皆さんがその価値を認めてくださった結果だと考えています。



以上、駆け足で、三田の家と芝の家について紹介しました。これらの活動については、実際に来て体験していただくことが一番だと思います。これらの活動は一般に公開していますから、オープンしている日ならどなたでもお越しいただけます。興味をお持ちの方は、三田の家については、事前にHPにてスケジュールをご確認ください。（HPアドレス：<<http://mita.inter-c.org/>>）また、芝の家については、現在は毎週水、金、土曜日の昼が活動時間になっています。

皆さんが実際にお越しくださることをお待ちしております。（長田 進）

## Article—④

## 「日吉の家」

2009年4月、綱島街道寄りに新しい校舎が誕生します。その新校舎の地下1階に設けられるのが学習支援スペース、「日吉コミュニケーション・ラウンジ（仮称）」です。ここは教員・留学生を含む全学生・職員が自由に集い、生活と学習の情報や意見を交換する会話の場所です。このスペースの使い方では教養研究センターが提案させていただき、実現したものが20畳の「和室」です。コミュニケーションはさまざまな空間で生み出されます。靴を脱いで、車座になり、くつろいだ雰囲気の中では普段の教室とはまた違ったアイデアが生まれることでしょう。コミュニケーションを促すためにIHクッカーと水場も用意される予定です。この新しい空間が「三田の家」（前項を参照のこと）の日吉版、「日吉の家」へと成長していくように、皆さんで積極的にこの和室ともども、「日吉コミュニケーション・ラウンジ」を授業や学生との活動に生かしていただきたいと思います。（横山千晶）

## 実験授業「現代の危機——宗教と民族問題」

2008年9月から12月にかけて計7回、日吉来往舎にて実施された実験授業「現代の危機——宗教と民族問題」は、昨年度まで行なわれた文部科学省学術フロンティア推進事業「超表象デジタル研究」プロジェクトの下で、新たな教養教育のかたちを生み出すべく積み重ねられてきた議論の成果を、授業を通じて学生に還元しようとする試みです。

上記プロジェクト内のコンテンツ研究ユニットの一テーマであった「信じる?—現代の民族・宗教問題」を引き継ぎ、ドイツ、朝鮮半島、日本、中東、中国といった様々な地域をフィールドとして研究している初見基（日本大学文理学部教授）、長原豊（法政大学比較経済研究所教授）、高柳俊男（法政大学国際文化学部教授）、柏崎千佳子（本塾経済学部准教授）、勝沼聡（東京大学東洋文化研究所非常勤講師）、矢吹晋（横浜市立大学名誉教授）の各氏を講師・コメンテーターとして招き、これに長堀祐造（本塾経済学部教授）、関根謙（本塾文学部教授）が加わったかたちで、授業を行ないました。

授業における講師と学生の関係は、しばしば前者による後者

に対する一方的な情報提供に終わりがちです。この両者の関係を双方向的なものに変えること、それがこの実験授業を実施するうえで我々がまず重視したことでした。そのために、まず講義60分+質疑応答30分という構成をとり、講師と学生の意見交換を促すかたちをとりました。加えて、当該テーマに対する理解を深めるうえで参考になる資料を参加学生で構成されるメーリングリストなどを通じて事前に配布することによって、学生が事前に自分の意見を準備し、積極的に議論に参加できるようにするためのサポートも行ないました。結果、公開講義として数十名の参加者を得た矢吹先生の回を始めとして、その他の回も十数名の熱心な学生の出席を得て、毎回活発な議論が展開されました。

今回の実験授業は、様々な意見、立場の学生が集まり、専門家の意見を安易に受容することなく思考し続けるための場としての役割を果たしたと我々は考えています。その意味で、教養教育の新しいかたちを模索するための一つの大きな示唆が得られたものと思っています。（勝沼 聡）

## サイエンス・カフェ

子供たちの理科離れを心配する声がありますが、理科（もしくは学問）が好きな子供は実はたくさんいることを私たちは経験的に知っています。サイエンス・カフェは、そんな子供たちや、子供の好奇心を保ち続ける大人たちのためのカフェとして2007年6月に開店して以来、およそ隔月の間隔で順調に開かれています。これまで生物学に関する話題が続きましたので、2008年7月（第7回）には、かねてから希望の多かった宇宙の話題をとりあげました。この『人間と宇宙のかかわり』（表 實・商学部教授）では、来年のガリレオ天体観測400周年にちなんで、自分自身でおこなう天体観測についてのお話を聞きました。続いて9月（第8回）も物理学の分野から『実演！回転物体の不思議な運動』と題して、「ケンブリッジの卵」の下村裕・法学部教授による色々な回転する「おもちゃ」を使った「実習」が好評を博しました。去る11月に開催された第9回は、また生物学に戻って『あなたもフェアブル！昆虫と話そう』（上村佳孝・商学部専任講師）。いつにもまして子供の姿が多くみられるカフェでした。ここではシロアリを使った実習が行なわれ、ある筆記用具を使えばシロアリの思いのままに歩かせられる事がわかり、参加者一同は大興奮でした。会場がイベントテラスでちょっと寒すぎたこと、その電気容量が小さすぎること、など問題を

残しましたが、それでも大変楽しい集まりとなりました。今回は、1月24日（土）14:00から来往舎シンポジウムスペースにて『天気のお話——いろいろな雲をつくってみよう！』（杉本憲彦・法学部専任講師）が開催されます。屋内ですので寒くありません。タイトルだけでも楽しくなってきましたから、きっとまた多くの子供が来てくれるだろうと期待

しています。飲み物を片手に、自由な学問の雰囲気をごんぶんに味わえるカフェです。皆さん、お誘い合わせて、是非ご来店ください。（鈴木 忠）



## 2008 年日吉キャンパス公開講座秋学期

本年度は「記録・記憶と構想の現場」というテーマを掲げ、2008年9月27日から12月6日までの毎週土曜日、2コマずつ計10回の授業が開催されました。今年も熱心な参加者に恵まれ、申し込み者数は268名、毎回の出席率は70パーセント前後。多くの授業で講義後も講師の先生方に質問や感想が寄せられ、活発な意見交換が行なわれました。

講師の人選にあたっては、昨年度から引き続き、人文、芸術、自然科学、社会科学など、各分野の授業を組み入れることを心がけると同時に、本年度は日吉の新しい一員となった協生館の大学院より、システムデザイン・マネジメント研究科とメディアデザイン研究科の先生にも講師として参加していただき、「公

開講座」は受講生に対して、創立150年を迎えた慶應義塾の研究・学問の「現場」を合わせてご紹介できる場として大いにその役割を果たしたと思います。

昨年より若手教員に参加していただき、幅広い内容の授業を設定することによって受講生の年齢層を広げ、あらゆる世代が共に学ぶ場をつくるように心懸けてきましたが、その成果は着実に現れています。上昇傾向にあった受講生の平均年齢も2年続けて下がり、今年は58歳になっています。一度参加して下さった方が繰り返し参加して下さる一方で、新しい参加者をいつでも受け入れられる、今後も開かれたキャンパスとして、ますます魅力的な講座をつくりたいと思います。(伊藤行雄)

## 日吉行事企画委員会 (HAPP) 秋学期の活動

日吉行事企画委員会 (HAPP) の秋学期の活動についてご紹介します。この委員会では、①新入生歓迎セッションと②公募企画セッションを二本の柱と定めて行事を企画・開催しています。公募企画セッションは、主として秋学期に行う公募型のプロジェクトです。2008年度秋学期は、11件の応募があり、秋学期担当の森吉直子先生を中心に、熱心な議論と厳正な審査を行い、企画再審査などの救済措置を経て、最終的に4件を採択しました。結果として2008年度秋学期は、公演者の都合から春学期に実施出来なかった特別企画(「映画『幕間』(1924):無声映画とピアノ・ライブのコラボレーション」と「塾長と日吉の森を歩こう」)の2本を合わせて、6本の企画を主催しました。全て、日吉キャンパス来往舎を主会場にしたものです。いずれ報告書において春と秋を合わせての主催行事一覧を示すことにいたしますが、どの企画も大変力の入った素晴らしい

ものでした。唯一大変残念なことは、「異国見聞『八十日間世界一周』1872・グローバリゼーション元年、ヴェルヌの見た横濱」をHAPP委員として担当することになっていた小湊昭夫教授が急逝されたことです。担当は森吉委員が引き継ぎましたが、HAPPの活動に対して設立当初からの一番の理解者であり、委員会にとっては、精神的支柱であった小湊先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。(小菅隼人)



秋学期公募で採択された学生企画のポスター

## 追悼：経済学部教授 小湊昭夫先生

最近では「開かれた大学」「地元と大学の融合」といったコンセプトが語られる機会が増えましたが、地域における大学のあり方を率先して模索、実践そして何よりも楽しんでいらしたのが小湊昭夫先生です。小湊先生は教養研究センター開所時に副所長としてセンターを支えてくださったわけではありません。横浜市民講座として発足した公開講座を日吉キャンパス公開講座へと発展させ、また日吉住民と慶應の学生の有志が一体となって日吉の街を盛り上げていくプロジェクトである「ヒヨシエイジ」にも2003年の立ち上げ以来一貫してご尽力なされ、協議会副会長

も務めていらっしゃいました。先生のカメラを通して生き生きと躍動する祭りの映像を見せてくださったことが偲ばれます。学生にも、地元の方々にも慕われた小湊先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。(不破有理)



## HRP2008

11月14日(金)、15日(土)の2日間に亘って、日吉研究支援センター主催によるHRP(Hiyoshi Research Portfolio)2008が開催されました。教養研究センターからの発表として、鶴岡セミナー活動報告会と6つのテーマのパネル展示が行われました。各テーマは次のとおりです。①慶應義塾大学の教育カリキュラム研究②身体知プロジェクト③鶴岡セミナー④サイエンス・カフェー極東証券寄附講座一般公開ゼミ⑤学びの場を考えるプロジェクト⑥特定研究「超表象デジタル研究-リベラル・アーツ教育のモデル構築」

アカデミック・スキルズ  
プレゼンテーションコンペティション

今年も教養研究センターでは極東証券株式会社からの寄附を受けて「アカデミック・スキルズ基礎編Ⅰ・Ⅱ」を3クラス、「応用編Ⅲ・Ⅳ」を1クラス開講しています。専門の異なる複数の教員が、異なる学部に所属する15名から20名の学生とともに作り上げるこれらのクラスでは、学生たちが活発な議論を基に、学問体力を伸ばしていきます。その成果を披露する場が、毎年2月に開催されるプレゼンテーション・コンペティションです。本年度も極東証券株式会社の菊池廣之社長をお迎えして、2009年2月6日(金)に開催されます。どなたでも参加できますので、ぜひとも足をお運びの上、学生の成長を見ていただきたいと思います。(横山千晶)

## 生命の教養学 2009年度予告

近年、広範な議論を呼んだ「ゆとり教育」をめぐる論争は、改めて「ゆとりとは何か」ということを私たちに考えさせるものでした。「ゆとり」という概念は、私たちを取り巻くさまざまな領域に存在します。教育はもちろん、制度、造形芸術や文学、成長し老化する人間の心理、集団の行動、工学、生態学、進化論、そして生命そのもの。これらさまざまな領域における「ゆとり」について、掘り下げたお話を理系・文系を問わず講師の方々から頂く予定です。(鈴木晃仁)

## 基盤研究 カリキュラム研究

2007年から続けてきた基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究②—4年間をみこした教養教育の研究」も、2カ年計画の集結を迎え報告書の発行に向けて大詰めを迎えています。報告書では、1)総合教育科目の分析、2)セメスター制度の問題点と提言、3)成績評価について、4)4年間をみこした教養教育のモデルという大きな4つの柱を立てて、調査・研究の報告とそれをふまえた提言を盛り込む予定です。報告書は、3月末日に発行予定です。(佐藤 望)

## 慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会

2009年1月7日(水)16:45より、新しい協生館の中の藤原洋記念ホールで、日吉で音楽を履修している学生たちが、パッサヤテレマンのバロックの名曲を、オーケストラと合唱によって演奏しました。この演奏会は、教養研究センターの身体知プロジェクトのひとつである「声を考える」(慶應義塾創立150年記念未来先導基金の2008年度プログラム)の一環として開催されたものです。新しいホールで演奏できるという喜びと不安を胸に、学生たちは精一杯の準備を進めていました。(佐藤 望)

## 新メンバー紹介



2008年10月、センターの副所長に交替があり、新しいスタートを切りました。組織が役割を持った人の集まりであるからには、人々の機能が組織の活動であることはいまでもありません。今後のスタッフの活動にご協力をお願いします。(左から武藤浩史副所長、松本実事務長、横山千晶所長、日水邦昭課長代理、不破有理副所長、甲賀崇司事務長付、種村和史副所長)

## 事務局だより 協働で創る!

昨年6月の人事異動で教養研究センターに就任いたしました。就任早々、教養研究の実験の一つとして、「『死』を想い、生きることを考える」をテーマとして開催された「鶴岡セミナー」では、事務局を担当するなかで地元関係者や講師の方々など慶應義塾の人脈と、学生・教職員が一体となって成し遂げる姿に、改めて感動しました。

ご承知のように日吉キャンパスに所属する教員は、人文科学、社会科学、自然科学、外国語、音楽、美術、体育、スポーツ医学の専門分野で、領域や学部を横断した研究も活発に行われています。教養研究センターは2002年7月に開所以来、この日吉キャンパスの特殊性を生かし、比類ない教養研究がボランティア・ベースで展開され、その研究成果は来往客から塾内外に発信され、教育現場の変動とともにさらに期待されていることを実感しております。ただ、その期待と責任感から所長・副所長をはじめとした方々のオーバーワークが気がかりです。手薄な事務局ですが協働で創る喜びを体感しながらお手伝いしたいと考えております。(日水邦昭)



Newsletter  
2009. Jan. No.13

慶應義塾大学教養研究センター (Keio Research Center for the Liberal Arts)

発行日 | 2009年1月15日 代表 | 横山千晶

〒223-8521 横浜市中区日吉4-1-1 TEL | 045-563-1111 (代表) Email | lib-arts@adst.keio.ac.jp

http://lib-arts.hc.keio.ac.jp